

シンポジウム「自由化に対応した土地利用型肉牛生産の現状と問題点」

粗飼料主体の飼養による牛肉の評価

前川 辰雄

Quality Evaluation of Beef Fed Mainly on Forage
Tatuo MAEKAWA

牛肉が輸入自由化され3年半経過したが、当初予想された以上に大量の輸入牛肉が出回り、国内牛肉の出回り量、価格に影響が出ている。国産牛肉は品種を問わず高品質肉を除き価格が下落し、まさに荒波にもまれた船のように進む方向を見いだせない状態である。わずかに黒毛和種のA-4、A-5の高品質牛肉のみ安定的な価格推移を示し、この品質の牛肉は自由化後も輸入牛肉に対抗できる実力を示している。他の品種、肉質のものは、価格面で輸入牛肉におされ価格下落が続いている。特に北海道の草資源を活用した「粗飼料主体生産の牛肉」は、まとも輸入物と競合し、いままで理解のあった生協等からも肉質の改善を求められ濃厚飼料多給与体系へ変換し皆無の状況となった。では全滅かというところではなく、濃厚飼料多給与体系ではあるが、形を変え従来より粗飼料を多給する肥育体系、「粗飼料多給型肥育」が求められてきており、北海道の草資源活用し別の形で必要性が出てきている。

1. 粗飼料主体生産牛肉の経過と現状

粗飼料主体生産の牛肉が北海道において生産され始めたのは、昭和40年代前半頃からである。当時すでに肉専用種の繁殖牛が北海道の豊富な草資源を活用し、放牧を取り入れた飼養がなされていた。さらに、乳牛の雄子牛が肉用化のため育成されはじめた。しかし、当時は大部分が子牛の段階で素牛として道外に移出されていた。一部の牛が放牧で大きくされ出荷6ヶ月前に濃厚飼料を飽食され肥育牛として出荷されているにすぎなかった。まさに粗飼料主体の肉牛生産であった。

しかし、北海道で肉牛肥育が増大するにつれ肥育効率、販売価格が高い等から濃厚飼料多給与体系へと移行していった。

その後、国内の生活向上により牛肉の消費が増加して

いくが、生産のほうは乳雄子牛肥育肉が大幅に増大しても消費に追いつかず価格が上昇していった。輸入牛肉は枠が設定されており自由に好きなだけ手に入れることができなかった。また、輸入牛肉は成長ホルモンの含有が指摘され安全性が疑問視されていた。このような情勢に、安定的に安全な牛肉を確保したい購買者側と、ホルモン等の使用していない安全な草主体での肥育を正当な評価をしてきて、安定的に販売したい生産者側とが意見の一致を見、粗飼料主体の牛肉での産地直送方式が生ずるようになった。そして近い将来国内消費もアメリカ並に赤身肉指向の消費になるとの考え方から、余分な脂肪をつけず赤身肉量の増加をめざす肥育方式であり、当然草地利用の放牧を取り入れたものであった。そのとき国内生産の主流は、数年後の牛肉自由化にそなえ、品質さえ良ければ輸入肉に勝るとの考えから濃厚飼料多給の方式になっており、脂肪交雑、肉色、肉締まりの良い物を生産し、また消費者もそのような肉を少々価格が高くても望んだ。輸入肉も日本向けに品質をどんどん改善し、消費者の好む牛肉となってきた。

そして牛肉輸入自由化。輸入牛肉は、量、価格共、国産牛肉を脅かすこととなった。そしてついに産直方式で生産実態を知っているはずの購買者側から「おいしそうに見える輸入肉が安く、色が悪くおいしそうに見える産直肉が高いのはなぜか。安全性はわかるがおいしそうに見える肉でもっと安くならないのか」と言う声が大きくなり肥育方式を変更せざるを得ない状況となった。

現在、ホクレンを経由する産直スタイルは数多くあるが、「粗飼料主体生産方式」肥育は皆無で、濃厚飼料多給与方式でより多くの粗飼料を給与させた「粗飼料多給型方式」に変わってきている。このことでさやかに草を利用していることをアピールしているのみである。品種においては、乳牛去勢、乳牛メス、アンガス等外産種、

表1

ブランド名	産地	品種	特色
ひまわりの里北竜牛	北竜町	ホル去勢	肥育一貫、粗飼料多給、自家配合利用
大雪アングス牛	上川町	アングス	粗飼料多給、安全重視
早来あんがす牛	早来町	アングス	放牧による粗飼料多給型肥育、赤身肉多い
北見牛	網走管内	ホル去勢	上質なホル去勢牛、粗飼料多給
Coopノーザンビーフ	阿寒町他	アングス他	粗飼料多給、赤身主体
鶴居村アップルビーフ	鶴居村	ホルメス	リンゴ粕入りの独特の飼料を給与
積丹牛	積丹町	日本短角他	地域内一貫生産、粗飼料多給、ヘルシービーフ
北草牛	別海町他	ホルメス	粗飼料多給、ヘルシービーフ
松前牛	木古内町	褐毛和種	低コスト生産、良質、安全

日本短角種、褐毛和種、黒毛和種とさまざまである。

主なものは表1のとおりである。

2. 今後の方向を左右する要因

国産牛肉全体に言えることであるが、もはや畜産関係者のみで今後の方向を見通せる状況ではなくなった。種々の要因で左右されることとなろう。国内の牛肉消費の長期見通しは、平成12年で105万-121万トンの予測である。現行94.7万トンであるから、10-28%増、年率1.5-3.9%の伸び予測で食料の中で唯一堅調な伸びとなる。さて、輸入牛肉関税率は平成11年に38.5%まで下がる。年平均2%弱の下げとなる。ここに第1の要因がある。安い輸入肉が回わり安くなる環境になる。

第2に為替変動である。為替は日本経済全体が世界経済のどの辺りに属するか、経済力が強いかわいかわいかで左右される。日本円が100円をはきんで80円になるか、120円になるかで、関税率より多く影響される。畜産経営が安定するまであと数年安定(一定)してはほしいものだ。

第3に国産牛肉でも黒毛和種のような高品質高価格のものから、乳牛経産牛の低品質低価格の牛肉までさまざまである。これらの品質差により国産牛肉間でうまくランクわけしてやれないものか。うまく住み分けして一定量を国産牛肉でシェアを確保したいものだ。国産牛肉どうしてシェアを食い合いしてもしようがない。

3. 生き残りのために

輸入牛肉の攻勢があるなかで、現行シェア42%の国産牛肉で住み分けを可能にするには、「Jビーフ」でも産地でも生産者でも安全性でもリンゴでもごぼうでも何で

も良いから宣伝することである。ありとあらゆる宣伝文句を駆使し、地域でも肥育に食べさせている優位性のものでアピールし宣伝し、消費拡大を計り現状のシェアを確保したい。

次には、やはり生産コストダウンである。同じ飼料代で肉量を増大させるか、廃棄している物で牛の飼料になる物を見つけるか、低コスト施設の利用を考えるか、それぞれの経営においてコストダウンを計らねばならない。

では、「粗飼料主体生産体系」の肥育はどうなるのか。残念ながら今の日本では、本当に理解した一部の消費者のみが購買するだけで、その量のみ契約的に生産されるという状態が続く。濃厚飼料が大幅に高くなるか、日本経済が弱くなり海外から牛肉を輸入できなくなった状態にならないかぎり、脚光を浴びる事はないであろう。

しかし、現状濃厚飼料多給と肥育でも、「粗飼料多給型肥育」が多くなっている。良質肉の生産のため肥育月令を延長するが、そのためには内蔵がしっかりしていなければならない。肥育前期に多量の良質乾草を給与する。肉牛肥育には良質乾草はいらないといわれてきたが、酪農経営並の良質乾草が必要になってきた。これは、黒毛和種肥育の世界でも同じで、良質乾草の手に入らぬ都府県では、輸入ヘイキューブを購入し給与している(逆に肥育後期は稲ワラタイプが好まれる)。このようなことから北海道の草を活用した肉牛生産は、形を変えて生き残っていると考えられ、草地を研究される方は、一層の良質草の生産と、増収に取り組まれることを希望します。